美術の窓(70)

古代古典美術の成立 ―飛鳥・白鳳・天平〔8〕
天平彫刻 ― 古典様式の円熟

大和文華館館長 吉川逸治

奈良に新しい都が建設される八世紀は、この古典美術の円熟期である。剛直な英雄の時代はすぎて、整備された大組織の時代という感が強い。東大寺の大仏は一つの文化が発展の絶頂でおちいる巨大趣味の病弊で、古典様式の中核である人間像の調和を破壊する危険をはらむ。だから爛熟期で、後半はすでに唐招提寺の木彫群など、つぎの時代にうけつがれる新傾向が力強く現われる。

塑像芸術　天平彫刻は、これまでの銅像・木彫のほかに塑像・乾漆像が加わり、これが当代の特徴的な技術となる。これら唐朝美術から学んだ新技術は、人体の自然な姿態、表情の多様さを写すのに適しているので、天平時代に最も活用される。ことに塑像芸術は、古代ギリシア・ローマ世界で装飾芸術としてさかんに利用され、古典後期の爛熟した様式を伝播させたスツッコ芸術が、東のガンダーラ、中央アジアの仏教世界に波及して、そこで後には泥像という平易な応用形式まで生み、後期ギリシア式仏教美術を長く存続させた国際的な技術の伝播したもので、この古代古典後期の技術を用いて、古典美術の人間探究を奈良の地で新たに試みようというのだから興味をひく。この時代に西欧では、北伊のチヴィダーレの聖像群が、わずかにビザンティン系塑像の遺例として伝えられているのにすぎないのを思うと、唐朝美術の恩沢をうけたとはいえ、天平美術の人間探究の豊富さに打たれる。

法隆寺の塑像　法隆寺五重塔の小塑像群や中門の金剛力士像が、和銅四年（711）に完成した再建造営の結果と考えられ、これらに食堂の梵天・帝釈天と四天王の塑像を加えるなら、八世紀初頭の塑像芸術でも、法隆寺は豊富な作例をもつといえる。

五重塔の小塑像群は、変化にとんだ姿態・身振りと表情の多様さを見せ、自由な技巧を楽しんでいる作者たちが思い浮かぶ。仏涅槃に号泣する弟子たち、維摩・文殊の問答など、説話の進行を演出する人物たちの心理と身振りを、線太く、ためらわずに表わしている。

中門の力士たちは、筋肉隆々と盛りあがるローマの兵士や闘技者のトルソを思わせるし、四天王は短髯の当麻寺の四天王についで、武装した恐ろしい唐の将兵の威力を思わせ、仏像彫刻のレパートリーがひろがるのをおぼえる。

七世紀後半の仏教美術には、祖国防護のための力の美術であるという側面を忘れてはならない。しかし、国力の充実は繁栄をもたらし、侵入の危機も去り、八世紀は、人間の豊かさをうたう余裕が満ちてきた。

執金剛神　東大寺三月堂の秘仏、執金剛神の色彩鮮やかな塑像は、頸や腕のふくれ上がった血管を示すほど細かい自然主義的描写をして、恐ろしい怒りの形相を作りながら、体軀の動勢は慎重にして、主力を顔面の精神表現にそそいでいる。この心理主義（倫理主義）的態度が八世紀前半の円熟した古典彫刻の新しい課題になっている。法隆寺五重塔塑像で見たような性格描写や心理的な反応、身振りの描写というだけではなく、そこに内観的な反省が加わってゆく。

三月堂日光・月光菩薩　このモラリスト傾向が明瞭に現われるのが、三月堂の日光・月光、戒壇院の四天王の塑像である。日光・月光の両眼は内をむいて心を観じていると指摘された言葉は、この天平彫刻の特質をいみじくもいい表わしている。わずかな変化のうちに日光菩薩は活動的な生を、月光菩薩は静観的な生を象徴して妙をえている。

戒壇院四天王　戒壇院の四天王も、姿態の動勢を執金剛よりもさらにひかえ目にして、表現は頭部から上半身までに集中し、脚部はほとんど胴体の緊張した重量と動作を支えられないのではないかと思うほど単純化している。甲冑の衣装が写実的に作られ、これが顔の忿怒相の種々な現われと巧みに協和して、動き激しければ衣装も開き、沈思すれば衣装も閉じる。これら四天王の相貌に古代ギリシアの人間四気質説の反映があるかとさえ思わせるほど、人間精神の観察が整頓されている。人の心をこれほど明確に伝えるほど、これら四体の造形表現は古典様式をこなして、人間性表現の普遍的明瞭性に達している。

十大弟子・八部衆　これと同様なことは、すでに興福寺の十大弟子・八部衆の乾漆像によっても成しとげられている。釈迦の弟子十人の性格の違った人物を表わすことは、造像家にこの心理主義的な考察と思考を行なわしめる機会を与えた。ここでも、彼は適当に体軀の表現はおさえて、顔の精神表現、性格描写に集中した。そして、若々しい時代の青春を喜ぶ感情は、十大弟子に永遠の日本の少年の幸福な姿を凝集させた。

八部衆の像もそうである。少年から青年に移りゆく多感な年頃の心理にひかれ、八部衆のまじめくさった表情をさだめている。彼らの深いまなざしも、外を見、内を観ずるごとく、心理の動揺を固定し、おそらく人間の情熱の神秘を感じている姿ではなかろうか。かような人間探究の行なわれだしたことは驚くべきことではないか。飛鳥彫刻の神秘性、それから絶対的な帰依、信仰の芸術に対して、これらの宗教彫刻はなんという人間的な性格に満ちて、楽天的であることか。

不空羂索観音　天平はしかし、仏の神秘を観ぜんとする人間の願いに応じた新しい仏像として、三月堂の不空羂索観音像をわれわれに伝え残している。堂の台座が二重に重ねられ、高すぎるせいか、下からは慈悲に満ちた温顔をよく拝むことはできないが、高くカメラをあげて撮った写真がこの映像を伝えて、いかにも聖武天皇のころの観音に対する人びとの気持に応じる面相を備えている。威力を強調せず、円満な相貌のうちに威厳と慈愛の表現を満たし、第三の眼を添えても不自然にならず、親しみにあふれ、しかも神秘的な偉大さをたたえ、天平の理想を示すがごとき尊像である。

東大寺の大仏　今日では、この不空羂索観音の像や、少し遅れて唐

季刊 美のたより No.126
平成11年2月18日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.